

鹿児島県総合教育センター

平成28年度長期研修研究報告書

研究主題

外国語科における自律的な学習者の育成を
目指した学習指導

—CAN-DOリストの活用と音声を重視した学習活動を通して—

鹿児島市立甲南中学校
教諭 吉永 あゆみ

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	2
3	研究の計画	2
III	研究の実際	
1	研修主題に関する基本的な考え方	
(1)	「外国語科における自律的な学習者」とは	2
(2)	「CAN-DO リストの活用と音声を重視した学習活動」とは	3
2	英語学習に関する実態調査の分析	
(1)	実施状況	6
(2)	学習活動に関する調査	6
(3)	英語学習への取組に関する調査	6
3	自律的な学習者の育成を目指した学習指導の工夫	
(1)	CAN-DOリストを活用した学習指導	7
(2)	音声を重視した学習活動	8
4	検証授業の実際	
(1)	検証授業Ⅰの実際	10
(2)	検証授業Ⅱの実際	15
(3)	事後調査の分析と考察	24
IV	研究のまとめ	
1	研究の成果	24
2	今後の課題	24

引用・参考文献

I 研究主題設定の理由

文部科学省は、「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」において、各中・高等学校が学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標をCAN-DOリストの形で具体的に設定することについて提言している（平成23年6月）。その中で、学習到達目標をCAN-DOリストの形で設定する目的として、「生涯学習の観点から、教員が生徒と目標を共有することにより、言語習得に必要な自律的学習者として主体的に学習する態度・姿勢を身に付けること」が挙げられている。また、グローバル化が急速に進む中で生きていく生徒たちにとって、外国語を通じて他者とコミュニケーションを図ろうとする態度は必要不可欠なものである。国際共通語である英語を使える生徒を育てるためには、生徒が自らの学習に目標をもち、課題解決のために意欲的に取り組むとともに、その学びを振り返りながら粘り強く学び続けようとする態度を身に付けることができるよう、授業づくりを行うことが重要であると考えた。本研究は、外国語科における自律的な学習者の育成を目指し、そのための学習指導はどうあるべきかを研究し、実態調査や授業実践を通して検証を行うものである。

本校では、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4技能を統合的に活用する言語活動を通して、コミュニケーション活動に意欲的に取り組む生徒の育成を目指してきた。その結果、諸調査から、基礎的・基本的な英語の知識・技能は身に付いていると考えられるが、4技能の中で、特に適切な表現を用いて自分の考えを述べたり、説明したりするなど、まとまりのある文章を書いて表現する「書くこと」に関して、習得した語彙や表現を十分に活用できていないことが明らかになった。また、学習においても、苦手としている技能は把握しているものの、どのように学習を進めてよいか明確でなく、改善することができない状況も見られた。

以上のことから、これまでの自分自身の指導形態では、自律的に学習する生徒を育てることは難しいのではないかと考えた。その要因としては、次の3点が考えられる。第一に、単元終了後に目指す生徒の姿が曖昧なまま言語活動を行っていたことである。第二に、目標達成に向けた指導計画に基づく的確な指示と、活動に対する評価が不十分だったことである。そして第三に、音と文字の関連について生徒の意識化が十分に図れず、「聞くこと」、「話すこと」の技能を育成する活動が「読むこと」や「書くこと」の活動に円滑につながっていなかったことである。

そこで、本研究では、先行研究等に基づき、自律的な学習者の育成の在り方について、学習到達目標を明確にしたCAN-DOリストを活用し、評価の工夫を行うとともに、音声重視した指導を「読むこと」、「書くこと」の文字指導へ円滑に移行する学習活動を行えば、生徒の学習意欲を高め、主体的に外国語の学習を継続し、外国語の学び方を身に付けた自律的な学習者を育成することができるのではないかと考え、本主題を設定した。

II 研究の構想

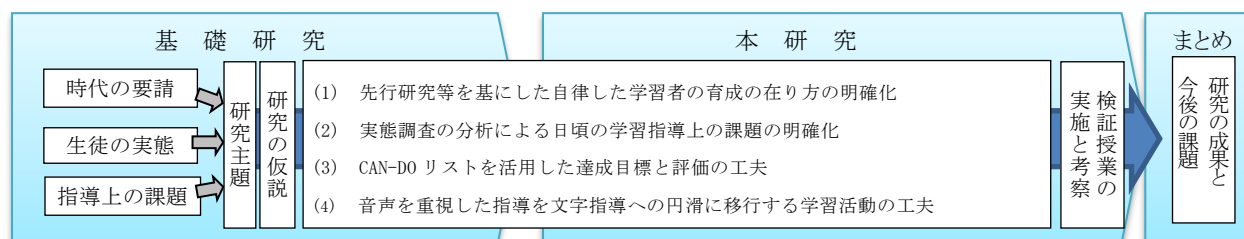
1 研究のねらい

- (1) 先行研究等を基に、自律的な学習者の育成の在り方を明らかにする。
- (2) 実態調査から、日頃の学習指導上の課題を明らかにする。
- (3) CAN-DOリストを活用した達成目標と評価を工夫する。
- (4) 音声重視した指導を文字指導へ円滑に移行する学習活動を工夫する。
- (5) 検証授業の分析を通して、研究の成果と課題について明らかにする。

2 研究の仮説

中学校外国語科において、学習到達目標を明確にしたCAN-DOリストを活用し、評価の工夫を行うとともに、音声重視した指導を文字指導へ円滑に移行する学習活動を行えば、学習への意欲を高め、外国語の学び方を身に付けた自律的な学習者を育成することができるのではないかな。

3 研究の計画



Ⅲ 研究の実際

1 研究主題に関する基本的な考え方

(1) 「外国語科における自律的な学習者」とは

本研究では、「自律的な学習者」を、「積極的に外国語を使おうとする態度をもち、目標に向かって自ら計画（Plan）し、主体的に実行（Do）、評価（Check）、改善（Act）していくことで、次の課題解決へ向けて学習意欲を持続させ、新たな計画を立て学習していくサイクルを確立している学習者」と捉えている。具体的には、英語によるコミュニケーション能力を身に付けるために、自分にどのような学習が必要なのかを見極め、学習到達目標に向けて計画を立て、解決方法を自ら見いだして選択する。次に、主体的に英語に触れ、他者と関わりながら計画を実行する。さらに、その学習の達成度を客観的に判断し、自分の学習に責任をもって改善していくことができる能力をもった学習者であると考えます。

自律的な学習者の育成に当たっては、学習のサイクルに着目した。表1は、外国語学習における自律的な学習者の在り方と指導上の工夫を、樋口^{*1)}（2012）の『英語授業改善への提言』を基にまとめたものである。評価に当たっては、パフォーマンス評価とポートフォリオ評価を用いて生徒の変容を捉えることとし、授業で言語活動に取り組ませる際には、学習への動機付けやコミュニケーション能力の育成の観点からも、音声を重視することが効果的だと考えた。

表1 自律的な学習者の在り方と指導上の工夫

学習 サイクル	定 義	自律的な学習者の姿	指導上の工夫
計画 (Plan)	目標を掲げ、その目標を達成するための計画を立てる。	自らの意志で目標を掲げ、いつまでに何をどのようにするのかという手段や方法を明確にすることができる。	- 実生活に即した言語の使用場面を設定する。 - CAN-DOリストを踏まえ、自分がその日の授業で何ができるようになりたいかを意識させる。 - 目標達成までの学習の見通しを立てさせる。 - 思考・判断・表現する活動に際しては、CAN-DOリストを生徒と共有する。
実行 (Do)	立てた目標に基づき計画を実行する。	- 他者との関わりの中で積極的に授業に参加しようとする。 - 自分なりの方法で主体的な学びを継続しようとする。	4技能を統合的に取り入れた学習活動を行わせ、4技能を総合的に育成する。 - 授業では、ペアやグループで英語を聞いたり話したり読んだりする活動を十分に行い、生徒が自分の力で読んだり書いたりする活動に無理なく取り組めるようにする。 - 言語材料の導入に当たっては、モデルを示したり、生徒と対話を行ったりすることを通して、その形式や意味を類推させ、活動を通して理解を深め、習得が図られるようにする。

*1) 樋口忠彦 編著 『英語授業改善への提言』 2012 教育出版

評価 (Check)	自己を対象化し自分の英語力を客観的に捉え、評価する。	- 目標達成に向けて現時点での自分の学習を客観的に振り返ろうとする。 - 何ができて、何ができていないのかを分析することができる。	- 今後の学習の仕方やこれまでの学習方法の改善につなげられるよう、毎時間振り返りの活動を行う。振り返りの活動においては、CAN-DOリストに照らして自分が何ができるようになったか、そして、今後の学習に生かしたい学び方に関して気付いたことも記録させる。 - 評価規準に基づき、達成度を確認させ、学びを振り返らせる。 - パフォーマンス評価 - ポートフォリオ評価
改善 (Act)	評価を通して、学習を改善し、主体的に学びを続けようとする。	- 自己の学習の評価を踏まえて学習を今後の学びに生かそうとしている。 - 同じような場面で、次にどのように変えればよいかを具体化・明確化し、計画を再立案することができる。	- 新しい単元の導入の際に、前単元でどのような学び方を通して学習を進めることが効果的であったかを振り返らせた上で、その後の見通しを立てさせる。 - 効果のあった学習方法は継続させるとともに、うまくいかなかったことについては改善を促す。

(2) 「CAN-DOリストの活用と音声重視した学習活動」とは

ア 「CAN-DOリストの活用」とは

CAN-DOリストとは、学習到達目標を、言語を用いて「～することができる」という能力記述文の形で設定した一覧表である。CAN-DOリストは、中期的・長期的に学習を振り返り、指導や学習の改善に役立てるために使用されるものであり生徒や学校の実態に応じて作成し、適切な時期に見直すことが重要であるとされている。

CAN-DOリストは、教師だけがもつのではなく、生徒と共有して、指導や学習に生かすことが大切である。このことにより、生徒は3年後の目指す姿に向けて学習の見通しをもつことができるからである。教師は、指導を通して適切な評価をすることにより、指導法を見直し、改善することができる。指導に当たっては、生徒の興味・関心を喚起し、協働的に学習する場を設定し、生徒が主体的に学びに向かう学習方法を取り入れるなどの工夫が必要となる。そうすることで、生徒も学習到達目標を明確にもつことができ、授業を通して「英語を使って～できるようになった。」という達成感や、「もっと～できるようになりたい。」という学習に対する意欲を高めることができる。また、教師の適切なフィードバックで、生徒は自らの学びを振り返り、学習を改善していくことが期待される。綾部^{*2)} (2014) は、「Can-Doリストを使う利点は、学習者に行動の目標／活動／振り返りのプロセスを自己評価／自己省察させることを狙っているので、『自律的な学習』を促進することにある。」としている。本研究では、単元の指導において学習の目標と評価の一体化を図り、教師と生徒がCAN-DOリスト（表2）を共有することで、指導及び学習の改善に効果的に活用することになっている。

表2 CAN-DO リスト

	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと
1	英語の音声と文字の特徴を理解して、アルファベットや身近なことを表す単語を聞き取ることができる。	英語の音声と文字の特徴を踏まえて、アルファベットや身近なことを表す単語を正しく読んで伝えることができる。	アルファベットや身近なことを表す単語を正しく読むことができる。	英文を書く上での規則を理解し、正しく使うことができる。
①	Pro.1	Pro.1	Pro.1	Pro.1

*2) 綾部保志 著 『自律した学習者を育てる英語教育の探究』 「CEFR研究を教育実践に活かすための視座」
2014 中央教育研究所

2	教師の指示や日常生活の身近なことを述べた文を聞いて、内容を理解することができる。	日常生活の身近な話題についてYes./No.などの受け答えを適切に行って、情報のやりとりをすることができる。	日常生活の身近なことを表す文を読んで、内容を理解することができる。	日常生活の身近な話題に関する文を正しく書くことができる。
①	Pro.2, Pro.4, Pro.10 PU3, PU4	Pro.2, Pro.4,5, Pro.10 PU3, PU4	Pro.2, Pro.4~6 PU3	Pro.2, Pro.4,5
3	ゆっくり、または、繰り返して話されれば、身近な話題に関する英文の要点を捉えることができる。	自分や身近な人を紹介したり、身近な場面で、疑問詞を用いるなどして、質問したり、答えたりすることができる。	130語程度の身近な話題に関する絵や図を含む文章を読んで、概要や要点を読み取ることができる。	自分の身近な人を紹介するために必要な情報を収集して、まとまりのある内容を4文程度で書くことができる。
①	Pro.3, Pro.5~9 PU.5~8, MP1~3	Pro.3, Pro.5~9 PU5, PU7, MP1~3	Pro.3, Pro.7~10 MP1~3, PU7~9	Pro.3, Pro.5~9 MP1~3, PU11
②			PU2	PU2
4	ゆっくり、または、繰り返して話されれば、まとまりのある英文を聞いて、曜日や日付、数字などの要点を聞き取ることができる。	行動や予定について日付や天気、曜日、数字などを適切に用いながら伝えることができる。 身近な場面で、許可したり、依頼したり、応じたりするときの表現を正しく用いて話し、意向を伝えることができる。	200語程度の日常の身近なことを表す文章（旅の計画や思い出）を読んで、その概要や要点を読み取ることができる。	自分の行動や予定（旅の計画や思い出）について、場所や時間などを適切に用いながら書くことができる。
①	PU1~3, Pro.10,11	Pro.10,11, PU7~11	PU6~11	Pro.10,11, PU7~11
②	Pro.1,2	Pro.1,2	Pro.1,2	Pro.1,2
5	ゆっくり、または、繰り返して話されれば、身近な場面で、相手の伝えたいことを聞いて、理解することができる。 ゆっくりまたは繰り返して話されれば、質問や依頼などの英文を聞いて、話し手の意向を理解し、言葉や動作で適切に応じることができる。	身近な場面で、自分の行動や考えを適切な接続詞を用いたり、場所や時間などを加え、具体的に説明したりすることができる。 相づちを打ったり、質問して意見を加えたりしながら対話を続けようとするることができる。	200語程度の簡単な文章（読んだり体験したりした情報や日本の芸能等についての説明文）を読んで、考えや伝えたいことを読み取ることができる。	接続詞等を効果的に用いながら、自分の行動や考えを詳しく述べるなど、50語程度の英文を書くことができる。
②	Pro.2,3, MP2, PU3	Pro.3,5, MP3,4	Pro.4~6	Pro.2~6, MP4
③	PU4	PU4	PU3	PU3
6	ゆっくり、または、繰り返して話されれば、身近な場面（道案内、インタビュー、電話）や世界のことを聞いて理解することができる。	身近な場面で、相手に勧めたり、応じたり、断ったりするときの表現を正しく用いて話し、意向を伝えることができる（道案内、電話等）。	200語程度のまとまりのある文章（世界のことについて）を読んで、内容を正確に読み取ることができる。	行動や物の様子について、適切な接続詞や表現を用いて書くことができる。 伝えたい内容を整理して50語程度で書くことができる。
②	Pro.5~8, PU5,6 MP5	PU3~6 Pro.3,6,8	Pro.7,8	PU5, MP5 Pro.5~8
③	PU2, PU4	PU2, UP4	Pro.1	Pro.1
7	ゆっくり読まれれば、日本の文化や興味・関心のある話題に関する話を理解することができる。	興味のある話題について、比較するなどして説明したり、賛否を示したりして、自分の立場や意見、感想を述べるすることができる。	250語以上のまとまりのある文章を読んで、必要な情報を把握して、その概要や内容を読み取ることができる。	自分の趣味や身近なテーマについて、具体的に説明しながら4文以上または50語程度の文章を書くことができる。
②	Pro.8~11 MP5,6, PU9	Pro.8~11 MP5	Pro.8~12 MP6, ER	Pro.8~11 MP5,6
③	Pro.2, MP6	MP6	MP6	Pro.2

8	ゆっくり、または、繰り返し話されれば、興味や関心があることについて、調べたり聞いたりして、内容を理解することができる。	身近な場面で、相手に依頼したり、質問したり、適切に応じる表現を正しく用いて話し、意向を伝えることができる。	250語程度の調べた内容の説明について必要な情報を把握し、その概要を読み取ることができる。	身近な場面での出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちを含んだ4文程度の英文を書くことができる。
③	Pro.1～4 PU1,2,4,5, MP7,8	Pro.1～4 PU1,2,4,5, MP7,8	Pro.1～4 PU1～3, MP7,8	Pro.1～4 PU1～3, MP7,8
9	ゆっくり、または、繰り返し話されれば、説明文（日本の伝統・文化）や対話等の要点や対話の流れ、説明の大切な部分を理解することができる。	身近な人やものなど（文化や伝統）について説明するための適切な表現を用いて、詳しく述べることができる。	350語程度のまとまりのある文章（文化の紹介、物語等）を読んで、内容を正確に読み取ることができる。	自分の学校や国の文化や伝統について、その起源や由来を基に4文または50語程度の文章で紹介する文を書くことができる。
③	Pro.5～8	Pro.5～8, PU5	Pro.5～8	Pro.5～8, PU6
10	まとまりのある英文（アナウンス、世界の偉人、思い出など）についてなどを繰り返し聞いて、全体の概要や内容の要点を理解することができる。	読んだり聞いたりして理解した内容について、自分の考えや気持ちをまとめ、分かりやすく話したり対話したりすることができる（中学校での思い出等）。話された内容について相づちを打ったり、質問したりすることができる。	400語以上の様々な文章（物語文や説明文等）を読んで、その概要や要点を理解するとともに、書き手の意向に対し自分の意見をもって読むことができる。	読んだり聞いたりして理解した内容について、自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、接続詞や代名詞などを適切に用いながら、5文程度の英文を書くことができる（中学校での思い出、学校紹介など）。
③	PU7, Pro.9, SP	SP	PU7, ER①②③	PU7, SP

* Pro.: Program, MP: My Project, PU: Power Up, ER: Extensive Reading は、教科書(SUNSHINE ENGLISH COURSE)の各単元名を表す。

イ 「音声重視した学習活動」とは

音声を重視した学習活動とは、「聞くこと」や「話すこと」の音声による活動の充実を通して、音声と文字の関連付けを丁寧に行う活動と捉えている。ある程度理解できる表現を継続的に聞き続けることは、言語習得に有効であるとされている。また、外国語活動では、身近なコミュニケーションの場面における英語を繰り返し聞いたり、その中で自分が使ってみたい表現を選んで発話したりする活動が行われている。ベネッセ教育総合研究所が行った「中高生の英語学習に関する実態調査」によると、中学校進学時に英語を話したり聞いたりすることに対して積極的である生徒が70%以上いるなど、外国語活動の成果が挙げられている。

中学校では、こうした成果を「読むこと」や「書くこと」の言語活動に結び付け、4技能を総合的に育成することが求められている。そのためには、音声と文字を結び付けた活動を丁寧に行うことが大切である。指導に当たっては、第二言語習得の認知プロセスに着目し、音声を重視した活動を取り入れていくこととした。第二言語習得の認知プロセスとは、言語習得の過程で「学習者の内部で起きる変化のこと」で、「学習者に取り入れられたインプットの気付き、理解、内在化、統合の認知プロセスを経ることによって、目標言語を運用する能力が付く」（村野井^{*3)}（2006））とされている。

また、本研究においては、音声を重視した指導の工夫の一つとして、音読指導の充実も図ることとした。音読は、目標言語を習得する際、心理言語学からも、外国語としての英語学習に必要不可欠であることが実証されており、「音読によって、スペリングと発音の結び付きを強化するとともに、学習した語彙や文法などを内在化できる」（鈴木・門田^{*4)}（2012））とされている。

生徒は、このような学習活動を通して音声を重視することの大切さを学ぶとともに、発音と文字の関連等について理解を深めることから、自律的な学習者の育成につながると捉えた。

*3) 村野井 仁 著 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 2006 大修館書店

*4) 鈴木寿一・門田修平 編著 『フォニックスからシャドーイングまで 英語音読指導ハンドブック』 2012 大修館書店

2 英語学習に関する実態調査の分析

(1) 実施状況

ア 調査の目的

英語の授業での活動や学習への取組について、生徒がどのように捉えているかを把握する。また、目標や学習方法についての意識を調査し、実態を把握する。そして、生徒の実態から明らかになった課題を解決するために指導の方向性を定める。

イ 調査の対象と時期

対象 本校第1学年生徒116人 時期 平成28年6月13日（月）

(2) 学習活動に関する調査

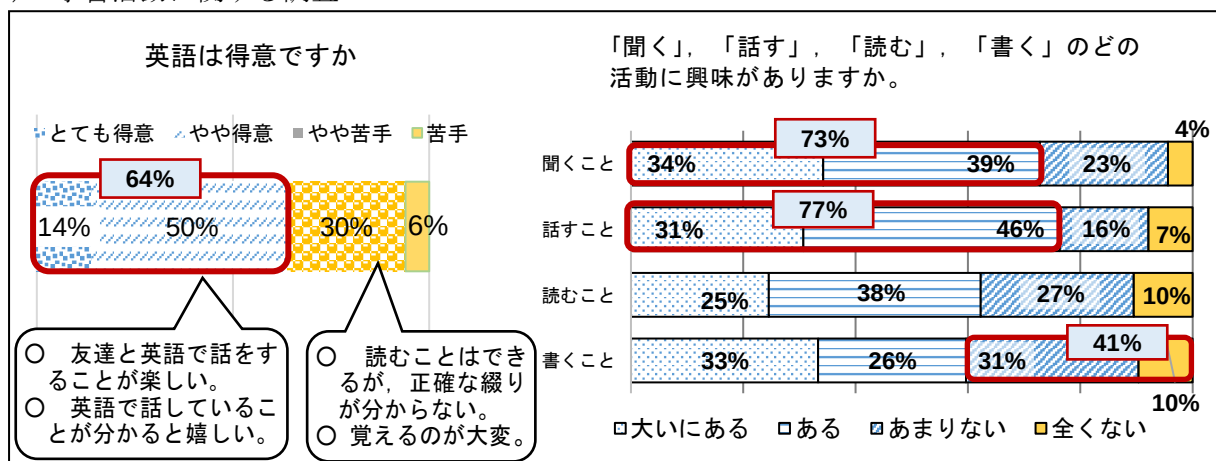


図1 英語学習に関する実態調査①

図1に示す結果から、64%の生徒が英語を「得意」と捉えていることが分かった。また、「聞くこと」に関する活動については、73%の生徒が興味があると回答している。その理由としては、「英語で話していることが分かって嬉しい。」などと答えている。また、77%の生徒は、「話すこと」に関する活動に関して興味があると回答している。その理由としては、「友達と英語で話をするのが楽しい。」、「英語で話せると格好いい。」などの回答が見られた。以上のことから、英語を使って対話をしたり、英語を聞いて、相手の伝えたいことが理解できたりしたときに、喜びを感じていることが分かった。

しかし、「書くこと」に関する活動に興味があると答えた生徒の数は4技能で最も少なく、興味がないと回答した生徒が41%となった。興味がない理由として、「自分なりに推測しながら読むことはできるが、正確な綴りが分からない。」、「覚えるのが大変。」などの理由があり、文字に対する抵抗があることが明らかになった。

(3) 英語学習への取組に関する調査

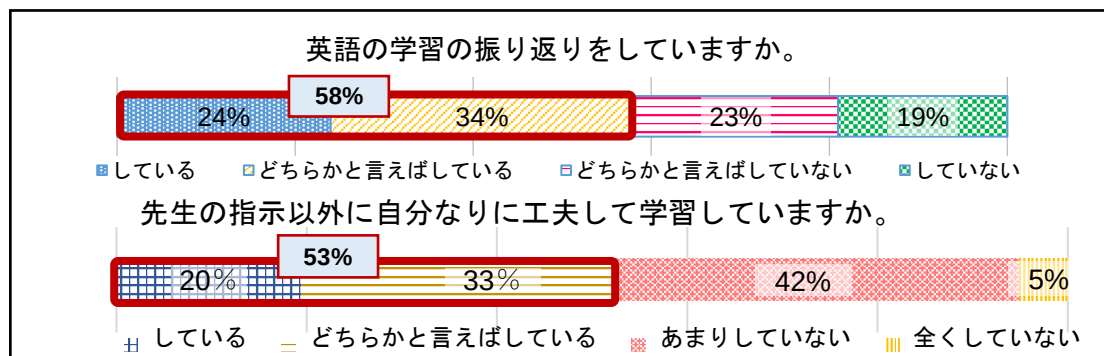


図2 英語学習に関する実態調査②

英語学習への取組に関する調査(図2)によると、「英語の学習の振り返りをしていますか。」という質問に対して、58%の生徒が「している」、「どちらかと言えばしている」と回答している。次に、「先生の指示以外に自分なりに工夫して学習していますか。」という質問に対しては53%の生徒が「している」、「どちらかと言えばしている」と答えており、学習に対して自分なりの工夫ができていると考えているものの、その割合は約半数にとどまった。したがって、調査を行った6月の時点では、全員が自分なりの学習方法を確立する段階には至っておらず、自律的な学習ができる生徒が多いとは言えないと考えられる。

以上のことから、生徒が自ら明確な目標を決め、その目標を達成しようとするとともに、学習を振り返り、改善し、次の課題解決へ向かおうとする態度や能力が身に付くよう指導を工夫する必要があると考えた。

3 自律的な学習者の育成を目指した学習指導の工夫

(1) CAN-DOリストを活用した学習活動

ア 見通し

3年間を見通した4技能の総合的な育成を目指したCAN-DOリストの形での具体的な学習到達目標を設定した。具体的には、「自分や身近な人を紹介したり、身近な場面で、疑問詞を用いるなどして、質問したり、答えたりすることができる。」と設定した場合、この目標を達成させるためには、実際に対話する場面を設定し、評価する必要がある。そこで、授業に当たっては、英語で聞いた内容を理解させた後に、音読を繰り返し行わせるとともに、文の構成や場面に応じた適切なコミュニケーション活動を通して活用できる力を育成をすることを目指した。

イ 振り返り

目標に対する学習の振り返りの時間を設け、自らの学習を客観的に振り返らせた。

評価に当たっては、CAN-DOリストとの関連

を図った評価規準を生徒と共有した。1単位時間の目標に対する評価には、CAN-DOリストに対応させた学習計画表を活用する。そして、単元終了時には、単元を通して何ができるようになったのかを振り返らせ、3年間を通じた学習到達目標に対する学習状況を把握させる。

本研究においては、学習過程を明記した学習計画表(図3)と2種類の振り返りカード(図4)を使用した。まず、第1時は学習計画表を提示して、見通しをもたせた。この学習計画表は、振り返りの時間にも活用することで、生徒に自分の学習状況を把握させることをねらった。また、各単位時間と単元の終末には、学習サイクルを意識した振り返りシートを配布し、学習方法の改善につながるようにした。さらに、この学習計画表と振り返りシートは、教師からのフィードバックを与えたワークシートと共にファイリングさせた。

＜学習計画表＞			
Class () No. () Name ()		全6時間	
Program 7 A beautiful Ocean			
CAN-DOリストでの目標			
最終到達目標			
学 習 目 標	努力度	期 限	
手段・方法		達成日	
☐ CAN-DOリストで達成目標と単元の関連を確認する。 例) 2年時「日本文化や興味・関心のあることを説明する」 3年時「身近なものや日本の伝統などについて適切な表現を用いて説明する」	4 3 2 1	Oct 27	
＜設定場面に基いて、学習すべきこと＞			
☐ 1. 「シャチについて学んだことを意見を加えて述べるために必要な」単語を知る。 ・ 疑問詞を用いて質問する。 ・ 日本語との違いに注意し、これまでに学習した語句を覚えるにしながら、正しく発音する。	4 3 2 1		
☐ 2. 「だれ?」と尋ねる方法を知り、表現できる。 ・ 情報を正しく理解するために必要な表現を活用することができる。 ・ これまでの学習を基にして、疑問詞のある疑問文の表現方法に気付き、活用しようとする。 ・ これまでの学習を基にして、疑問文の作り方を確認して、活動に積極的に参加し、理解する。	4 3 2 1		
☐ 3. 「彼を/彼女を」のような代名詞の表現ができる。 ・ 内容に応じて、適切な代名詞を用いて表現することができる。	4 3 2 1		
☐ 4. 「いつ?」と時間を尋ねる方法を理解する。 ・ 情報を正しく理解するために必要な表現を活用することができる。	4 3 2 1		
☐ 5. 教科書の内容を理解して、正しい音声で声を出して読むことができる。 ・ 相手に伝わるように、相手を見たり、アクセントを付けたりして、正しい発音で読むように練習する。	4 3 2 1		
☐ 6. 学習を振り返り、これからの学習を改善する。 ・ 振り返りシートで確認して、改善する。 ・ CAN-DOリストで、できるようになったことを確認して、目標を確認する。	4 3 2 1		
* 目標と達成期限を記入しよう。 * 目標達成のための具体的な手段・方法を書き込もう。 * 授業後に目標達成できたら□にチェックしよう。			

図3 学習計画表

Reflection card

Class () No. () Name ()

Program 7 The Wonderful Ocean

Goal :

《CAN-DO リストとの関連》

No.	評価内容	Total
4	○ 学習方法を設定するために、グループでの話し合いに積極的に参加することができた。	4 3 2 1
	○ 間違いを恐れず、積極的に英語で話そうとすることができた。	4 3 2 1
	○ 英語を聞いて、内容を理解することができた。	4 3 2 1
	○ 教科書の文を英語らしく読むことができた。	4 3 2 1
	○ 英文を聞いて、正しく書くことができた。	4 3 2 1
5	○ 間違いを恐れず、積極的に英語で話そうとすることができた。	4 3 2 1
	○ 自分以外の人が話す英語を聞いて、内容を理解することができた。	4 3 2 1
6	○ アドバイスされたことを基に、修正して改善することができた。	4 3 2 1
	○ シャチ等について、40 字程度の英文で話すことができた。	4 3 2 1
	○ 相手に伝わりやすいように、ジェスチャーや表情、正しい発音で表現することができた。	4 3 2 1
	○ 自分のことを話すとき、原稿を見ずに、臨記して、またはメモを参考に表現することができた。	4 3 2 1
	○ 自分以外の紹介文を聞いて、英語で理解することができた。	4 3 2 1
今日、できるようになったこととどんなこと？		4 3 2 1

さらにできるようにするために、どのような取組みをしますか。

Evaluation card

Program 7 The Wonderful Ocean

Class () No. () Name ()

Goal :

《CAN-DO リストとの関連》

No.	評価内容	Total
計画	○ ALT や先生から出されたテーマを理解することができた。	4 3 2 1
	○ 学習方法を設定するために、グループでの話し合いに積極的に参加することができた。	4 3 2 1
	○ 間違いを恐れず、積極的に英語で話そうとすることができた。	4 3 2 1
	○ CAN-DO リストで自分の理解度を確認して、学習の見直しを立てることができた。	4 3 2 1
	○ まだ学習していない表現を知り、これからの学習でどのように理解していくか計画を立てることができた。	4 3 2 1
積極的な取組	○ 教科書の内容を聞いて、おおよそ理解することができた。	4 3 2 1
	○ 間違いを恐れず、積極的に英語で話そうとすることができた。	4 3 2 1
	○ イルカやシャチなどの生物について、情報を集めることができた。	4 3 2 1
	○ 自分以外の人が話す英語を聞いて、相づちを打ったり、副情したりして積極的に英語を使おうとし内容を理解しようとしたことができた。	4 3 2 1
	○ 学習内容が分からなかったとき自分でも調べたりするなどして、理解することができた。	4 3 2 1
評価	○ その方法！	4 3 2 1
	○ アドバイスされたことを基に、修正して改善することができた。	4 3 2 1
	○ 表現方法を繰り返し練習したり教科書を正しい目で読むことで、英語の特色や表現方法を理解することができた。	4 3 2 1
	○ シャチやイルカ等のことについて、150 字程度の英文（別紙文）で話すことができた。	4 3 2 1
	○ 相手に伝わりやすいように、ジェスチャーや表情、正しい発音で表現することができた。	4 3 2 1
今後の取組	○ 発表するとき、原稿を見ずに、臨記して、またはメモを参考に表現することができた。	4 3 2 1
	○ 自分以外の発表を聞いて、英語で質問することができた。	4 3 2 1
	○ 質問された問いに対して、適切に答えることができた。	4 3 2 1
	○ 学習を振り返って、うまくいった理由やうまくいかなかった原因がわかった。	4 3 2 1
	○ 学習計画表 Evaluation Card やこれまで自分が書いた文章などを見て、学習を振り返り、誤解以外でも理解（よりよく表現）しようとする	4 3 2 1
○ 今回の学習を通して、似たような場面でも計画を立てて学習していく方法を理解することができた。	4 3 2 1	
○ 具体的！	4 3 2 1	
○ CAN-DO リストを活用して、中学低学年で学習する内容のうち、現在、自分がどのくらい理解できていて、今後、どのような表現を学習していくのか確認することができた。	4 3 2 1	
○ どのような方法で学習していくのか、理解できた。	4 3 2 1	
《最後に》		4 3 2 1

図 4 単位時間と単元の振り返りカード

(2) 音声を重視した学習活動

ア 音声と文字の関係を意識させる指導の工夫

言語材料を指導する際は、それらの使用場面を生徒がイメージできるような提示に努めることは言うまでもないが、個々の新出語句の指導に当たっては、正しい発音を聞かせることに留意する。デジタル教材やCDなども必要に応じて活用する。単語等を提示する場合は、発音と綴りの関係に生徒が気付くように、繰り返したり、ゆっくり発音したりする。

また、生徒が発音練習を行う時は、教師の示すモデルを可能な限り忠実に再現できることを求める。例えば、l と r や th と s (z, d) の発音の違いについても繰り返して触れるなど、正しく聞いたり話したりする力を育むための指導を意図的に行う。正確に発音できるようになることは、正確に書く力につながるからである。ただし、理解したことを習得し、活用できるようになるには一定の期間を要することを前提として、丁寧な指導を行いながら形成的に評価し、生徒の意欲を保つよう留意することが大切である。このような指導を通して、英語の音声が発音と綴りと切り離せないことに気付かせ、正しい英語の発音で発話しようとする態度を育む。

英語には、発音と綴りの関係に一定の規則が見られるものがある。その規則を身に付けさせることにより、正確に読む力と未知の単語の読み方を予測する力を養うことができる。鈴木・門田（2012）は「予測によってとりあえず単語を音にできると、頭の中で復唱でき、記憶しやすく」なり、「また、スペリングの規則を知っていることで、逆に不規則なものが認証でき、結果的に正しく読む力やスペリング力が身に付く。」と述べている。また、松香^{*5)}

（2008）は、この表音文字である英語の規則を知ることによって「単語のスペリングや発音を丸暗記する必要はなくなり、自主的な勉強法へ転換を助ける」としている。

加えて、英語には、例えば、I want to go to Italy. の want の t のように、直後に同じ音声があると発音されない（脱落する）ものもある。他にも、話し手が伝えたい部分によって発

*5) 松香洋子 著 『フォニックスってなんですか?』 2008 mpi

音の強さが変化する特徴がある。例えば、I went to the park to play soccer. と発話する場合、強調したい部分が場所か行動かにより、強く発音される箇所が異なってくる。

以上のことから、音声と綴りの関係を丁寧に指導することは、英語を自分の力で正しく読むことができる能力を育てることにつながる。そして、書く活動において生徒が感じる戸惑いや困難さを軽減することができる。したがって、このことは、生徒の英語学習の意欲を持続させるとともに、効果的な学び方を習得させることにもつながると考える。

イ 英語表現に慣れ親しませる音読

単元を通して音読にも着目する。英語では、単語を正しく発音できるようになっても、文中で活用できるようになるわけではない。音読は、「文法や語彙、構文などの言語材料を内在化する。」（鈴木・門田（2012））とされていることから、新出単語を意味のあるまとまりの中で繰り返し活用させることによって、その意味や用法の習得を図ることとした。指導に当たっては、単語の発音と綴りを確認した後、その使い方を意味のまとまりで区切り、内容を理解させてから行い、意味を伝える活動となるよう留意する。そして、英語表現に慣れ親しませることで習得させることをねらう。このことにより、生徒は、英語表現を無理なく習得でき、学習に対して達成感と意欲をもつことができると考える。

本研究では、上記の「(1) CAN-DOリストを活用した学習活動」、「(2) 音声を重視した学習活動」を研究の視点として学習指導の工夫を行った。それぞれの視点での指導の流れを表3に、各視点を学習指導の過程に位置付けた例を表4に示す。

表3 研究の視点及び各視点における指導の流れ

(1) CAN-DO リストを活用した学習指導	
見 通 し	1 CAN-DO リストの対応する項目について、自分の学習状況を振り返らせる。 2 単元の学習を通してできるようになりたいことを確認させる。 3 教師の示す単元の学習計画を基に、授業や家庭学習で自分が取り組みたいことを考えさせる。
振 り 返 り	《1 単位時間》 1 計画表を基に自己評価をさせる。 2 本時の学習で分かったことや、CAN-DOリストに照らし合わせてできるようになったことを確認させる。 3 次回取り組みたいこと、家庭学習に生かしたいことを振り返りカードに書かせる。 《単元終末》 1 単元終末用の振り返りカードを配布する。 2 本時の学習でできるようになったことを確認させる。 3 今後取り組みたいこと、家庭学習に生かしたいことを振り返りカードに書かせる。
(2) 音声を重視した学習活動	
音 声 と 文 字	1 モデルを聞き、正しい音声で繰り返させる。 2 発音と綴りの関係に規則性がある事に気付かせ、繰り返し練習させる。 3 まとまりのある語句や文章を繰り返し練習させ、語と語の連結などの音声の規則や文構造について理解させる。 4 身に付けた音声の活用を図るコミュニケーション活動を行う。
音 読	1 本文を聞いて概要を理解させる。 2 本文を見て正しく発音できるように、語と語の連結による音変化などに留意させ、繰り返し練習させる。 3 意味のまとまりで区切り、内容の理解を深めさせる。 4 文章の意味内容にふさわしく読むために、声の大きさや読む速さを変えたりさせる。

表4 各視点を学習指導の過程に位置付けた例

	単元の流れ	自律的な学習者の育成を目指した工夫【研究の視点】
導 入	学習到達目標の確認 評価基準の設定	- 学習到達目標の提示 【CAN-DOリストを活用した学習活動】 - CAN-DOリストを生徒と共有する。 - 目標に応じた学習過程を設定する。
	スキーマ形成 (内容の概要確認) 新出語句の導入	発音・リズムを意識させる。 【音声を重視した学習活動】
展 開	本文の内容理解 新出文法の導入・活動	- 教師と英語でのやりとりで内容を理解させる。 - 学習サイクルを意識した活動を工夫する。 4技能を統合的に取り入れた学習展開を行う。
	- 教師（と ALT）によるモデル対話 - 使用場面を設定した対話活動 - ペア・グループ活動 - 発展的な表現活動 - 本文の音読	- 実生活に即した場面を設定し、即興で対話できるような活動の工夫をする。 - 口頭練習したことを適切に表現できるか確認する。 - 文構造や内容を確認し、音の強弱や発音に注意して音読させる。 【音声を重視した学習活動】
終 末	自己評価, 相互評価	- 学習到達目標達成に向けた1単位時間の振り返りを行わせる。 - 単元を通じた学習を振り返らせ、次の単元の学習に向けて、改善点を考えさせる。 【CAN-DOリストを活用した学習活動】

4 検証授業の実際

(1) 検証授業Ⅰの実際 My Project ① 「自分のことを話そう」 (6月実施)

ア 単元の指導目標

- (ア) 間違いを恐れず、積極的に英語で話そうとする態度を養う。
- (イ) 既習の表現を用いて自己紹介の文を正しく書いたり、話したりすることができるようにする。
- (ウ) 自己紹介文を聞いたり、読んだりして、表現された内容を理解させる。
- (エ) 自己紹介するときの単語や文の構成、流れを理解させる。

イ 検証の視点と具体的な手立て

(ア) CAN-DOリストを活用した学習指導

	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと
CAN-DO リスト の能力 記述文	ゆっくり、または、繰り返して話されれば、身近な話題に関する英文の要点を捉えることができる。	自分や身近な人を紹介したり、身近な場面で、疑問詞を用いるなどして、質問したり、答えたりすることができる。	130語程度の身近な話題に関する絵や図を含む文章を読んで、概要や要点を読み取ることができる。	自分の身近な人を紹介するために必要な情報を収集して、まとまりのある内容や日記を4文程度で書くことができる。
単元の 学習到達 目標	自己紹介文を聞いて、話された内容から、相手について理解することができる。	既習の表現を活用し、相手を意識した適切な表現を用いて自分を紹介することができる。また、内容について質問したり、答えたりすることができる。	自己紹介の文を読んで、紹介された人について、数字や場所などの確に理解し、内容を読み取ることができる。	自分のことについて、相手に理解してもらうために、適切な表現を用いて正しく書くことができる。 英語特有の決まりを守って書くことができる。

(※ CAN-DOリストの能力記述文は、本校のCAN-DOリストの例の本単元に関わる部分を抜粋)

(イ) 音声を重視した学習活動

モデルを参考に作文し、それを基に、音声による表現活動を行った。そして、できるだけ多く練習することで、間違いを恐れず表現できるようにした。そして、互いに気付いた点や良かった点等をアドバイスさせ、よりよい表現にしようとする態度を育てることをねらった。単元の最後には、ALTや教師に自己紹介し、自己紹介文に対して質問されたことに英語で答えさせた。この活動を通して、「自分の思いを伝えられた」という達成感と、英語で対話のできた喜びを味わわせ、学習意欲の持続をねらった。

ウ 単元の実際

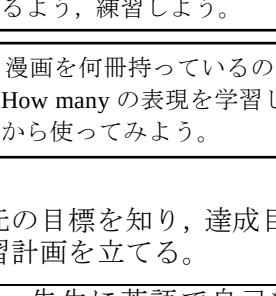
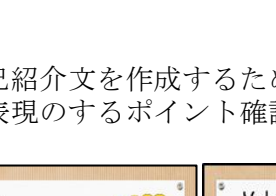
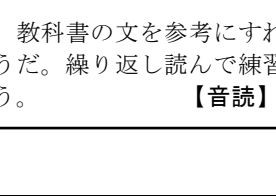
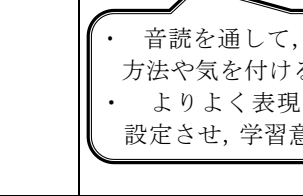
(ア) 単元の指導計画

	【学 習 目 標】 主 な 学 習 内 容	【研究の視点】
第1時	【学習目標を知り、計画を立てよう】 ○ これまで学習した表現を用いて自己紹介する。 ○ モデルを参考に、自分をよりよく知ってもらうために具体的な表現方法を話し合い、よりよく表現するポイントを確認する。 ○ 自己紹介に必要な語句に気付き、繰り返し練習する。	計画 (Plan) 【見通し】 【音声と文字】 【音読】
	【自己紹介文を書き、グループで自己紹介し合おう】 ○ モデルを参考に、グループで自己紹介する。 ・ 質問されたことを参考に補足・修正する。 ・ 既習事項を使って作成した自己紹介文をできるだけたくさんの人に聞いてもらい、自己紹介するときに注意することや、気付いたことなどについてアドバイスし合う。 ・ 表現できるようになった文は音声を参考にしながらノートに書く。	実行 (Do) 評価 (Check) 改善 (Act) 【見通し】 【音声と文字】 【音読】
第3時	【自己紹介し、学習を振り返ろう】 ○ クラスで自己紹介する。 ・ 自己紹介についての質問に対して英語で答える。 ・ 自己紹介文と、質問に対して答えた文を自己紹介カードに書く。 ・ 相互評価並びに自己評価をする。 ・ 他の自己紹介を聞き、自分の紹介文をより良いものにしようとする。	評価 (Check) 改善 (Act) 【振り返り】 【音声と文字】 【音読】

(イ) 授業の実際

(第1時)

学 習 内 容	形態	指導上の留意点 (【研究の視点】)
1 英語で挨拶をする。 2 Q&Aをする。  しっかり相手の顔を見て話さないと、伝わらないな。【音声と文字】  モデル文を自分の立場で答えるとどうなるかな？ 【見通し】	一斉 ペア	・ 英語で挨拶をし、学習の雰囲気をつくる。 ・ Q&Aシートを参考にして、相手を意識した対話ができるよう指導する。 ・ 正しい発音や適切な表現を意識させる。

3 ALTの自己紹介文を聞く。 内容を確認し、質問する。  だいたい分かったけど、分からない表現もあるな。自分も言えるようになるよう、練習しよう。【見通し】 漫画を何冊持っているのかな。 How many の表現を学習したばかりだから使ってみよう。【見通し】	一斉 - 既習事項で理解できることを実感させ、学習意欲を高める。 ALT: Hello, I'm Zoe Womack. I'm from Australia. I'm twenty-seven years old. This is my family. I have two brothers. I like manga. I have many comic books. - ALTについて更に詳しく知りたいと思う内容を、既習事項を活用して質問するよう促す。
4 単元の目標を知り、達成目標に向けた学習計画を立てる。 Zoe先生に英語で自己紹介しよう。 英語で自己紹介するために、どのような表現ができるだろうか。	一斉 本時・単元の目標を知らせ、活動に対する意欲を高める。
5 教科書の例文を聞く 6 新出語句を確認する。  Thank you.はthank と you の k と you がつながって聞こえていたのか。正しく発音できるように練習しよう。【音声と文字】 7 教科書を音読する。 - 正しい音声で読むよう留意する。 - 表現方法や文の構造を確認する。	一斉 - 生徒が理解できるまで繰り返し聞かせる。 - 日本語との発音の違いに気付かせる。 - 発音と綴りの関係に気付かせ、正しい発音の仕方を理解させる。【音声と文字】 一斉 - 自己紹介する際の参考となることに気付かせ、本人になったつもりで音読するよう促す。 - 日本語との発音の違いに気付かせ、教科書の本文に印を付けさせる。 - 正しい音声に留意させ、繰り返し練習させる。
8 自己紹介文を作成するために、よりよく表現のするポイント確認し、設定する。 - Name - Age (年齢) - 部活/習い事 - 好きなこと/もの/人 など 5文以上 Volume (声の大きさ) Speed (スピード) 発音 (英語らしく) Eye contact (アイコンタクト) ジェスチャー など  教科書の文を参考にすればよさそう。繰り返し読んでも練習してみよう。【音読】【見通し】	ペア Ask a question! Answer the question!  教科書の文を参考にすればよさそう。繰り返し読んでも練習してみよう。【音読】【見通し】 - 音読を通して、自己紹介する際の表現方法や気を付けることを意識させる。 - よりよく表現するためのポイントを設定させ、学習意欲を高める。【見通し】
9 振り返りをし、今後の学習につなげる。 今日の学習で、できるようになったことはどんなことですか？ 自己紹介を相手に言う好きなことか、しみを英語で言えるようになった。 今日の学習で、できなかったことはどんなことですか？ 20 (twenty) が言えなかった。 できるようにするために、どのような取組をしますか。 復習ノートで自習をする。	個 - 振り返りカードに記入させ、学習意欲を高める。 - 文字と音声の関連の重要性に気付くなど、学習を客観的に見つめ直す機会とする。【振り返り】

(第2時)

学 習 内 容	形態	指導上の留意点 (【研究の視点】)
1 英語で挨拶をし、学習の雰囲気をつくる。 2 Q&A をする。	一斉 ペア	・ 相手を意識した活動になっているか机間指導する。 ・ 相手に対する質問とその質問に対して Yes/No を使って答える。
3 目標と学習の流れを確認する。 自己紹介に向けて練習しよう。	一斉	・ 目標を明確にし、本時の学習についての見通しをもたせる。
4 教科書の音読練習をする。  日本語の意味とは違う順に並んでるんだ。 【音読】 【見通し】	グループ	・ 文字を確認しながら正しい音声に留意させる。 ・ 意味のまとまりを意識させ、文構造の違いに気付かせる。 【音読】
5 教科書の文を参考にして、自己紹介し合う。(相互評価)  「日曜日以外を表す表現は月曜日から土曜日まで。」というのか。使ってみよう。 【見通し】	グループ	・ 相互評価させ、よりよいスキットになるよう修正・改善させる。
6 表現したことをノートに書く。  「3」はどう綴るんだっただかな。正しく読む練習をしよう。 【音声と文字】	個	・ 正しい英語の音声と文字の関連に気付かせる。 【音声と文字】
7 ペア・グループで協力し、よりよい紹介文を作成し、練習する。	ペア グループ	・ 修正したものを繰り返し練習させる。
8 振り返りをし、今後の学習につなげる。	個	・ 単元の目標と流れを確認し、学習を振り返らせる。

(第3時)

学 習 内 容	形態	指導上の留意点 (【研究の視点】)
1 英語で挨拶をし、学習の雰囲気をつくる。 2 ペアで Q&A をする。  Q&Aに何度も取り組むうちに、質問に対してパツと答えられるようになってきた。 【見通し】	一斉 ペア	・ 繰り返し練習することで、無理なく会話表現を習得できていることを実感させる。 【見通し】
3 目標と学習の流れを確認する。 自分のことを話そう。	一斉	・ 本時の目標を明確にし、学習意欲を高める。
4 自己紹介をよりよく表現するポイントを確認し、教科書の本文を音読する。  ずいぶん覚えてきたから、今度は自己紹介のつもりで表現を加えてみよう。 【見通し】	一斉	・ 評価規準を確認させる。 ・ 正しい発音や相手を意識した表現で音読させる。 ・ よりよく表現するポイントを提示し、伝わりやすく表現するにはどうしたらよいかを意識させる。 【見通し】

5 自己紹介の練習をする。  話す流れをイメージするとメモを見ないですらすら言えるようになってきた。 【音読】	ペア	・ よりよく表現するポイントを意識させる。 ・ 繰り返し練習することで、無理なく習得できていることを実感させる。 【振り返り】
6 自己紹介し合う。 ・ 相手を意識して表現する。	ペア	
7 ALT または教師に自己紹介する。 8 振り返りをし、今後の学習につなげる。  自分のことは言えるようになったから、自己紹介文を参考にして、周りの人のことも言ってみよう。 【振り返り】	一斉 個	・ よくできていた生徒をグループ、または全体で発表させる。 ・ 単元を振り返らせ、できるようになったことと、改善すべき点を明らかにし、今後の学習への意欲とする。 【振り返り】

エ 検証授業Ⅰの分析と考察

(ア) 成果と課題（○は成果，△は課題）

a CAN-DOリストを活用した学習指導

- CAN-DOリストを基にした学習到達目標を示したことで、学習到達目標に向けて見通しをもたせることができた。
- 目標に対する振り返りの時間を設定することで、生徒が客観的に学習の到達度を認識し、学習の改善へ向かう様子が見られた。
- △ 生徒が自分の学習到達度を把握し、学習への動機付けとするために、生徒にCAN-DOリストの活用ポイントを押さえさせる工夫が必要である。

b 音声指導を重視した学習活動

- 発音を基に英語を書かせるなど、音声と文字を関連付けた学習活動の工夫を行ったことで、英語を聞いて文字もイメージしながら発音している生徒の様子が見られた。
- △ 音声と文字を関連付けた学習活動が、継続した学びにつながるものになるよう、工夫していく必要がある。
- △ アイコンタクトや相づちを打たせるなど、相手を意識したコミュニケーション活動を日頃から十分意識させることを継続して行う必要がある。

(イ) 分析と考察

自己紹介文は、小学校外国語活動でも扱っており、生徒も慣れ親しんでいる。そこで、この単元では、次の学習活動を行った。まず、ALTの自己紹介を聞いて、それが自分自身の自己紹介に生かせることに気付かせ、自己紹介文を作成させた。教科書のモデル文を正しい発音に留意して音読練習させた後、自己紹介文を繰り返し口頭で練習させ、文字で表現させた。これらの活動を通じて、文字を見て正しく発音するなど、音声と文字の関係を意識して活動するようになった。

検証授業Ⅰの成果と課題を踏まえ、検証授業Ⅱでは、それぞれの視点について次のような工夫も必要と考え、以下のような工夫を加えることとした。

a CAN-DOリストを活用した学習指導

- 学習計画表にCAN-DOリストの能力記述文と単元の目標を示し、毎時間の振り返りにも活用する。

b 音声を重視した学習活動

- 「音読は文字インプットに基づいて、それぞれどのような発音であるかを知覚し、その後それを声に出して発音するタスクである。繰り返し練習することで、苦もなくてできる『自動性 (automaticity)』を獲得することができるようになる」(鈴木・門田 (2012)) ことから、音声と文字の接続を円滑にするための音読を工夫していく必要がある。

(2) 検証授業Ⅱの実際 Program 7 “The Wonderful Ocean” (10月～11月実施)

ア 単元の指導目標

- (ア) 間違いを恐れず、相手を意識して積極的に英語で話そうとする態度を養う。
- (イ) 疑問詞のある疑問文や代名詞を含む、イルカやシャチについての英語を聞いたり読んだりして理解することができるようにする。
- (ウ) 疑問詞のある疑問文や、代名詞を適切に用いて、学んだことを自分の意見を加えて話したり書いたりして表現することができるようにする。
- (エ) 身近な人やものを紹介したり、自分の意見や考えを述べたりするときに必要な語句や表現を理解させる。

イ 検証の視点と具体的な手立て

- (ア) CAN-DO リストを活用した指導と評価の一体化の工夫
 - 生徒自身の学習の振り返りと今後の学習内容の確認を行い、意欲を喚起する。
 - 単元の目標を提示し、何をどのように学習していくのかについて見通しをもたせる。
 - 単元終了時の振り返りカードで、目標に対する学習の振り返りを行い、今後の学習に向けた改善点を考えさせる。

	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと
CAN-DO リスト の能力 記述文	ゆっくり、または、繰り返して話されれば、身近な話題に関する英文の要点を捉えることができる。	自分や身近な人を紹介したり、身近な場面で、疑問詞を用いるなどして、質問したり、答えたりすることができる。	130語程度の身近な話題に関する絵や図を含む文章を読んで、概要や要点を読み取ることができる。	自分の身近な人を紹介するために必要な情報を収集して、まとまりのある内容や日記を4文程度で書くことができる。
単元の 学習到達目標	イルカやシャチについて説明された英文について、正確に聞き取り、質問したり、質問に適切に答えたりすることができる。	イルカやシャチについて疑問詞を用いて尋ねたり、適切に答えたりすることができる。代名詞を適切に用いて説明することができる。	イルカやシャチについての説明を読んで、その生態などについて代名詞などを適切に理解し、内容を読み取ることができる。	イルカやシャチのことについて理解したことを、適切な表現を用いて3～4文でまとめることができる。

(※ CAN-DO リストの能力記述文は、本校の CAN-DO リストの例の本単元に関わる部分を抜粋)

(イ) 音声を重視した学習活動

- 音読を繰り返し行うことで、日本語との表現の違いに気付かせる。
- 単語と音声の関係やアクセントなど、デジタル教科書やモデルを聞いて英語特有の表現に気付かせ、自分の言葉(表現)として表現できるようにする。
- 内容を理解した後に音読を行うことで、語と語の結び付きに気付き、正しい英語の音声で表現しようとする態度の育成を目指す。

ウ 単元の実際

(ア) 単元の指導計画

	【学 習 目 標】	【研究の視点】
	主 な 学 習 内 容	
第1時	【学習内容を知り、学習の計画を立てよう】	計画 (Plan)
	○ 前単元の音読を行い、正しい音声と文字の認識と本文の内容理解を深める。 ○ 学習目標を知り、単元での学習計画を立てる。 ・ モデル文を参考に、イルカやシャチについて分かったことをスキットで表現するために、どのような表現方法があるか知り、今後の学習の計画を立てる。 ・ スキーマ形成 (概要把握) ・ ALT と教師でモデルを示す。	【見通し】 【音声と文字】 【音読】
第2時	【人の名前などを尋ねたり、その人について意見を述べたりする表現を知ろう】	実行 (Do)
	○ 既習事項を用いて、疑問詞の必要性を感じさせる。 ・ 新出語句の確認 ・ 本文の内容理解 ・ 新出文法の理解① (疑問詞 who, 人称代名 (目的格)) ・ 写真やイラストを用いながら説明する表現を知る。 ・ 音読による正しい音声と文字の認識	【見通し】 【音声と文字】 【音読】
第3時	【人について「～を/に」という表現を知ろう】	実行 (Do)
	○ 質問文を作成する上で必要な疑問詞やその活用方法について知り、理解する。(人称代名詞) ○ スキットを作るための準備をする。 ・ 新出語句の確認 ・ 本文の内容理解 ・ 新出文法の理解② ・ 音読による正しい音声と文字の認識	【見通し】 【音声と文字】 【音読】
第4時	【「いつ～しますか」と尋ねる表現を知り、理解しよう】	実行 (Do)
	○ 質問文を作成する上で必要な疑問詞やその活用方法について知り、理解する。(疑問詞 when) ○ 紹介文のための準備をする。 ・ 新出語句の確認 ・ 本文の内容理解 ・ 新出文法の理解③ ・ 音読による正しい音声と文字の認識 ○ スキットの準備①	【見通し】 【音声と文字】 【音読】
第5時	【本文の内容を読み取ろう】	評価 (Check) 改善 (Act)
	○ 本文の内容を理解し、教科書から読み取れることをスキットできるよう、マッピングする。 ・ マッピングしたものを基にスキットを練習する。 ・ 作成したスキットを他の生徒に紹介する。 ・ アドバイスをもらい、修正する。(相互評価) ○ アドバイスを基に、発表の仕方等工夫するなどする。 ○ メモ等を見ないで言える練習を繰り返し行う。	【見通し】 【音声と文字】 【音読】
第6時	【スキットをし、学習の振り返りをしよう】	評価 (Check) 改善 (Act)
	○ スキットをし、相互評価する。 ・ 正しい発音に留意する。 ・ スキットした内容を音声を書き。 ○ 振り返りカードに記入する。 ○ 自ら計画、主体的に実行、客観的に評価、振り返り、改善できたか。 ○ 相手を意識し、分かりやすく伝える工夫ができたか。	【音声と文字】 【音読】 【振り返り】

(イ) 授業の実際
(第1時)

学 習 内 容	形態	指導上の留意点 (【研究の視点】)
1 英語で挨拶をし、学習の雰囲気をつくる。 2 前時までの復習をする。 Program 6 の音読をする。  ケンの気持ちになって読むと読み方が変わってきて楽しいな。【音読】 3 単元の目標を知り、学習計画を立てる。 シャチやイルカについてスキットしよう。  今回の学習はCAN-DO リストのどの部分に関係があるのかな。【見通し】 4 本時の目標を知る。 目標達成に向けて学習の計画を立てよう。	一斉 ペア 一斉 一斉	- 登場人物になりきって、正しい音声で読ませる。 - 役になりきって音読すると、文の強弱や強勢を意識することを実感させる。【音読】【音声と文字】 - CAN-DO リストで現在の達成度を確認させる。 3年間の到達目標を意識させ、自分の学習状況を把握させる。 - 学習への意欲をもたせる。【見通し】 - よりよく表現するためのポイントを生徒と共有する。
5 表現のポイントを確認する。 《よりよいスキットのために…》 - 学習した表現を活用する。 - 教科書をよく読む。 - 英語らしく発音する。 - 相手に伝わりやすく表現する。 4～5回のやりとりをする。 - 自分の意見を入れる。  どんなスキットができればいいか分かってきた。まず教科書をよく読んでみよう。【見通し】 - 学習計画表に記入する。 - 学習への見通しをもつ。  6時間でどのように学習を進めるのだろう。【見通し】  この時間に学習するこの表現はスキットに使えるかもしれないな。よく読んで練習しよう。【見通し】 6 教科書の内容を把握する。  教科書の内容が大体分かってきたけど、まだ聞き取れない部分があるな。モデルをよく聞いて、繰り返してみよう。【音読】【音声と文字】	一斉 一斉	- 内容の伝わりやすいスキットをするための具体的な目標を生徒に設定させる。 - 評価規準を設定して学習内容を明確にすることで、学習意欲を高める。【見通し】 - 単元の流れ(計画)を確認し、学習への見通しをもたせる。【見通し】 - 単元の学習計画を基に、今後の学習の取組について自分なりの学習方法を考える機会とする。【見通し】 - Q&A を行い、本文の概要を理解させる。 - 内容が理解できた本文を繰り返し練習させる。【音読】【音声と文字】
7 振り返りをし、今後の学習につなげる。  難しい発音もあるから、家でも毎日音読してみよう。【振り返り】	個	単元の目標と流れを確認し、学習を振り返らせる。

(第2時)

学 習 内 容	形態	指導上の留意点 (【研究の視点】)
1 英語で挨拶をし、学習の雰囲気をつくる。 2 教科書を音読し、新出語句の確認をする。  dolphin の ph は f と同じ音になるな。【音声と文字】  head of や has a は単語がつながって聞こえるな。読むときに意識してみよう。【音声と文字】 3 Guess Who? クイズをする。 Yes/Noで答えられる質問をし、カードの名前が誰であるかを当てさせる。 4 単元の目標を確認する。 人の名前などを尋ねたり、その人について意見を述べたりする表現ができるようになる。	一斉 一斉 一斉 一斉	・ 繰り返したり、ゆっくり発音したりすることで、日本語との発音の違いに気付かせる。 ・ 発音と綴りの関係に気付かせ、正しい発音の仕方を理解させる。【音声と文字】 ・ 繰り返し音読させることで、音の連結や区切りに気付かせる。【音声と文字】 ・ クイズを聞き、誰の説明をしているか、内容を理解させる。 ・ 既習事項を活用できることに気付かせる。 ・ 単元の目標を知り、学習計画表で確認し、終末のイメージをもたせる。
5 表現の仕方や答え方を知る。  一言で「この女性は誰ですか？」と言うには何と言えればいいのかな？【見通し】 6 ペアで繰り返し練習する。  何度も繰り返しているうちに使い方が分かってきた。シャチを紹介する場面でも使えそう。【見通し】【音声と文字】  him と his, they と them は似ているけれど、使われ方が違うから、読むときに意識して慣れていこう。【見通し】【音声と文字】 7 表現したことをノートに書く。  練習では言えたのに、書けない単語があるな。単語をよく見て読んで、書けなかったところは書いて練習しよう。【見通し】	一斉 ペア 個	・ 既習事項との比較により who の有用性に気付かせ、表現方法を理解させる。 ・ 言語材料を用いたパターン・プラクティスをさせ、音声に慣れ親しませる。 ・ 繰り返し練習させることで、無理なく習得していることに気付かせる。【見通し】【音声と文字】 ・ 意味を理解させてから音読させることで、言語材料を習得できることを意識させる。【見通し】【音声と文字】 ・ 音声と文字が切り離せないことに気付かせ、学習意欲をもたせる。【音声と文字】
8 振り返りをし、今後の学習につなげる。 振り返りカードに自己評価を記入する。  スキットでもしっかり表現できるように、書けなかったところに気を付けて何度も読んでみよう。【振り返り】	個	・ 本単元の目標と流れを確認し、学習を振り返らせる。 ・ できるようになったことやうまくいかなかったことを振り返らせ、学習の改善へつなげさせる。【振り返り】

(第3時)

学 習 内 容	形態	指導上の留意点 (【研究の視点】)
1 英語で挨拶をし、学習の雰囲気を つくる。 2 新出単語の確認をする。 3 前時に学習した英文を音読する。  like them の k の音が聞こえないな。 書かれていても読まれないことがあるんだな。 【音声と文字】 4 前時までの学習を振り返り、本時の 目標を確認する。 人について「～を/に」という 表現を知ろう。	一斉 ペア 個 一斉	・ 文字を確認しながら正しい発音 に留意させる。 ・ 意味を理解し、文字を意識しな がら正しい音声で読ませる。 ・ 繰り返し音読させることで、音の 連結や区切りに気付かせ、正しく読 めるような意識付けをする。 【音声と文字】 ・ 目標を示し、学習の見通しをも たせる。
5 モデル文を参考に活動を行う。  同じ言葉を繰り返さないようにし たりする場面で使えそうだな。自分 の意見を加えるスキットにも使える な。 【見通し】 6 練習した文章をノートに書く。  教科書に書いてあることを意識し ながら読んできたから、書くときも 楽に書けるようになった。これから も英語を意識しながら読んでいこ う。 【見通し】 7 音読練習をする。  人称代名詞を使えば同じ言葉を繰 り返さなくて済むな。 【音読】【音声と文字】  シャチについての印象を伝える表 現があるな。他にも使えそうな表現は ないかな。 【音読】	ペア 個 ペア 個	・ 既習事項を活用して、自分の意 見を加えるなど、繰り返し口頭で 練習し、日本語との表現の違いに 気付かせる。 ・ 今後の学習との関連を意識させる。 【見通し】 ・ 声に出しながら書かせ、音声を参考 にして英語を書くことで、習得したこ とが無理なく書いて表現できること に気付かせる。 【見通し】 ・ 意味内容を理解して音読すること で、英語表現に慣れ親しみ、その用法 を習得していることに気付かせる。 【音読】【音声と文字】 ・ 学習方法を習得していることを実 感させる。 【音読】
8 振り返りをし、今後の学習につな げる。 ・ 振り返りカードに自己評価を記 入する。  家に帰ったら、これまで出てきた人 称代名詞をまとめてみよう。 【振り返り】	個	・ 単元の目標と流れを確認し、学習 を振り返らせる。 ・ 継続した学習になるように、学習 振り返らせる。 【振り返り】

(第4時)

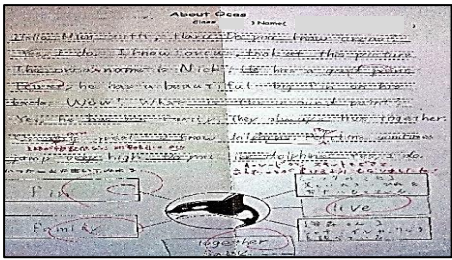
学 習 内 容	形態	指導上の留意点 (【研究の視点】)
1 英語で挨拶をし、学習の雰囲気をつくる。 2 音読練習をする。 学習した本文を日本語で聞き、英語にしてい  何度も練習してきたから、日本語を聞いて、英語で表現できるようになってきた。 【音読】  まだ、言えないところがあるな。もっと練習して言えるようになるう。 【見通し】 3 前時までの学習を振り返り、本時の目標を確認する。 「いつ～しますか」と尋ねる表現を知り、理解しよう。	一斉 ペア 一斉	- 正しい発音に留意させる。 - 日本文から英文にすることが、できるようになっていることに気付かせ、言語材料を無理なく習得できていることを実感させる。【音読】 - 目標を示し、学習への意欲をもたせる。
4 新出語句を確認する。 5 Q&Aから疑問文を考える。 6 外国語活動で慣れ親しんだ英文から疑問文を考え表現する。  小学校で慣れ親しんだ表現だから、分かりやすいな。もっと言葉を入れ替えて練習してみよう。 【見通し】【音声と文字】 7 練習した文章をノートに書く。 8 全体で発表する。  When を使った文をスキットでも使ってみよう。 【見通し】【音声と文字】	一斉 一斉 一斉 個 一斉	- 正しい発音に注意させ、練習させる。 - 外国語活動で慣れ親しんだ表現を用いてパターンプラクティスを行う。 - 繰り返し活用してみることで表現方法を習得できることに気付かせ、文構造を理解させる。【音声と文字】 - 質問と答えの文をノートに書かせる。 - 習得したことを今後の学習に生かせることに気付かせる。【音声と文字】
9 振り返りをし、今後の学習につなげる。 振り返りカードに自己評価を記入する。	個	本単元の目標と流れを確認し、学習を振り返らせる。

(第5時)

学 習 内 容	形態	指導上の留意点 (【研究の視点】)
1 英語で挨拶をし,学習の雰囲気をつくる。 2 音読練習をする。  繰り返し練習してきたから, () 内の言葉も自然に言えるぞ。 【音読】  語と語がつながる音も自然に出せるようになってきた。 【音声と文字】 3 前時までの学習を振り返り,本時の目標を確認する。 本文の内容を読み取り, スキットの準備をしよう。	一斉 ペア 一斉	・ 空所のある本文をペア読みさせる。 ・ 内容に合った表現を意識させる。 【音読】 ・ 繰り返し音読させることで, 音の連結や区切りが正しく読めるようになっていることに気付かせる。 【音声と文字】 ・ 目標を示し, 学習への意欲をもたせる。
4 キーワードや絵を見ながら内容を確認する。  マッピングする時は, 気付いたことや分かったことを書き出してから関連するものをつなぐとアイデアをまとめやすいな。 【見通し】 5 何度も練習し,グループで発表し合う。  発音もしっかりしていて, すらすら読めているな。僕も読む練習をしよう。 【見通し】  正しい発音を意識していたから, 友達の話す英語がよく聞き取れた。 【音声と文字】  何度も練習しているうちに, キーワードだけで, 言えるようになってきた。もっと伝わりやすい表現をしてみよう！ 【見通し】【音声と文字】	ペア グループ	・ 教科書とワークシートを照らし合わせながら, 対話することができるか確認させる。 ・ 目標達成に向けて, 音読で内容や言語材料が無理なく習得できていることに気付かせる。 【音読】【音声と文字】 ・ 発表を聞いて, 良かった点, 改善点を話し合わせる。(相互評価) ・ 他のスキットを聞いて, 自らのスキットを改善する意欲付けにする。 【見通し】【音声と文字】 ・ 相互にアドバイスを与えることで, 話すことに自信をもたせる。 【音声と文字】
6 振り返りをし,今後の学習につなげる。 振り返りカードに, 自己評価を記入する。	個	・ 本単元の目標と流れを確認し, 学習を振り返らせる。

(第6時)

学 習 内 容	形態	指導上の留意点 (【研究の視点】)
1 英語で挨拶をし,学習の雰囲気をつくる。 2 音読練習をする。  スキットでもうまく表現できるよう,内容を意識して読んでみよう。 【音声と文字】 3 前時までの学習を振り返り,本時の目標を確認する。 シャチなどについてスキットをし,学習の振り返りをしよう。	一斉 ペア 一斉	・ 登場人物になりきって音読させる。 ・ 目的意識をもたせ,内容に合った音読にさせる。 【音読】
4 単元の音読練習をする。  スキットをするつもりで,表情を工夫したり,ジェスチャーを入れて練習してみよう。 【見通し】 5 スキットを修正・確認する。  すらすら言えるようになってきた。相手の顔もよく見てしっかり言えるように,もっと練習してみよう。 【見通し】  ジェスチャーを入れたり,伝えたいところを強く発音して,分かりやすく伝えられそうだから,練習してみよう。 【見通し】 6 スキットをする。  自分たちが伝えたいことをイメージしながら発表ができた。友達にも分かりやすいと言ってもらえた。 【音声と文字】 7 全体で発表する。  疑問文の答え方を工夫したり,声の大きさを変えたりすると伝わりやすいな。 【振り返り】 S1: Look at this picture. This is Nick. I like him. S2: Who is Nick ? S1: He is an orca. He has a beautiful big fin on his back. S2: Wow! Do orcas have families ? S1: Yes, they do. They always live together. This is a baby. S2: Oh, it's cute. I like her.	ペア ペア グループ 一斉	・ 正しい発音に留意させ,練習させる。 ・ 前時のアドバイスを受け,よりよい発表ができるようにさせる。 ・ 目的意識をもたせることで,意欲的にコミュニケーション活動に取り組ませる。 【音声と文字】 ・ スキットをさせる。 ・ 繰り返し練習したことで,メモや暗記してスキットができた達成感を味わわせる。 【音声と文字】 ・ 数ペアを全体で発表させる。 ・ 発表を聞いて,相互に評価し合う。 ・ 他のスキットを聞き,比較することで学習意欲を高める。 【振り返り】

8 スキットをワークシートに書く。 	個 ・ スキットしたことをワークシートに書かせる。 ・ フィードバックを行う。 ・ 音読を幾つかのパターンで繰り返し行ったことで、文字を無理なく習得していたことに気付かせる。 ・ 書いて表現できることで、学習意欲を高める。 【振り返り】
9 単元の振り返りをし、今後の学習につなげる。  CAN-DOリストの目標を大体達成できたと思う。でも、まだ自信がないところもあるから、できるようになったことは忘れないようにして、自信のないところは復習をしっかりやっておこう。 【振り返り】	個 ・ 単元の振り返りカードに記入させる。 ・ CAN-DOリストで自らの学習を振り返らせ、フィードバックすることで、学習の改善と今後の見通しをもたせる。 【振り返り】

エ 検証授業Ⅱの分析と考察

(ア) 成果と課題 (○は成果、△は課題)

a CAN-DOリストを活用した学習指導

- 単元の終末には学習サイクルを意識した振り返りカード(図5)を作成し、CAN-DOリストに基づく学習計画表と共に活用したことで、生徒は自分の身に付けている力を確認し、学習に見通しをもつことができた。
- 毎時間の振り返りで、単元の目標に向けて自分の取組状況を確認させることにより、今後の取組について考えさせることができた。

△ 見通しと振り返りの充実が図れたが、振り返りを踏まえた学習方法の改善に向けた指導が不十分であった。

b 音声指導を重視した学習活動

- 音読を幾つかのパターンに分けて行った活動が、音声と文字の関連の重要性に気付かせ、読むことに意欲的に取り組む生徒の増加につながった。
- 本文の概要を理解させた後に音読させたことで、内容に応じて強弱を付けたりするなど、読み方を工夫する生徒の姿が見られた。
- 検証授業後のテストにおいて、文構造に関する問題の無答率がゼロとなった。また、内容理解の問題においても、内容をよく理解して答えている生徒が増えた。
- 音読を繰り返し行ったことで言語材料の習得、活用が図られたものと思われる。
- △ 生徒が内容を理解するために、より主体的に音読を行えるような指導の工夫を継続して行っていく必要がある。
- △ 音声から文字への円滑な接続のために、より丁寧な音声指導の充実が必要である。

Reflection card				
Class () No. () Name ()				
Program 7 The Wonderful Ocean				
Goal: シャ、イルカについて、スキットしよう。				
〈CAN-DOリストとの関連〉 自分や身近な人を紹介したり、身近な場面で、疑問詞を用いるなどして、質問したり、答えたりすることができる。				
	学習内容			Total
計画	○ 学習方法を安定するために、話し合いに積極的に参加することができた。	④ ③ ② ①		16
	○ 間違いを恐れず、積極的に英語で話そうとすることができた。	④ ③ ② ①		
	○ CAN-DOリストで自分の理解度を確認して、学習の見通しを立てることができた。	④ ③ ② ①		
	○ まだ学習していない表現を知り、これからの学習でどのように理解していくか計画を立てることができた。	④ ③ ② ①		
積極的な取組	○ 教科書の内容を聞いて、おおよを理解することができた。	④ ③ ② ①		18
	○ 間違いを恐れず、積極的に英語で話そうとすることができた。	④ ③ ② ①		
	○ イルカやシャチなどの生物について、教科書から情報を集めることができた。	④ ③ ② ①		
	○ 自分以外の人が話す英語を聞いて、相手を打ったり、質問したりして積極的に英語を使おうとし、内容を理解しようとするすることができた。	④ ③ ② ①		
評価	○ 学習内容が分からなかったとき、自分で調べたりするなどして理解することができた。	④ ③ ② ①		20
	○ その方法:)	④ ③ ② ①		
	○ アドバイスされたことを基に、修正して改善することができた。	④ ③ ② ①		
	○ 英語の特徴や表現方法を理解することができた。	④ ③ ② ①		
今後の取組	○ シャチやイルカ等のことについて、4~5回以上で初読することができた。	④ ③ ② ①		14
	○ 相手に伝わりやすいように、ジェスチャーや強弱、正しい発音で表現することができた。	④ ③ ② ①		
	○ 発表するとき、原稿を見ずに、脱稿して、またはメモを参考にしながら発表することができた。	④ ③ ② ①		
	○ 自分以外の人の発表を聞いて、英語で質問することができた。	④ ③ ② ①		
振り返り	○ 質問された問いに対して、適切に答えることができた。	④ ③ ② ①		14
	○ 学習を振り返って、うまくいった理由やうまくいかなかった原因がわかった。	④ ③ ② ①		
	○ 学習計画表、Evaluation Cardやこれまで自分が書いた文章などを見て、学習を振り返り、授業以外でも理解(よりよく表現)しようとするすることができた。	④ ③ ② ①		
	○ 今後の学習を通して、似たような場面で、計画を立てて学習していく方法を理解することができた。	④ ③ ② ①		
まとめ	○ CAN-DOリストを活用して、中学校3年間で学習する内容のうち、現在、自分がどのくらい理解できていて、今後、どのような表現を学習していくのが望ましいか、確認することができた。	④ ③ ② ①		14
	○ どのような方法で学習していくか、理解できた。	④ ③ ② ①		

図5 生徒の書いた単元の振り返りカード

(3) 事後調査の分析と考察

図6に示す実態調査において、検証授業Ⅱの後に意識して取り組んでいる学習について、「計画を立てている」と答えた生徒が1回目の調査から10ポイント減少している。この要因として、目標に向けて見通しをもたせる工夫が不十分であったことが考えられる。しか

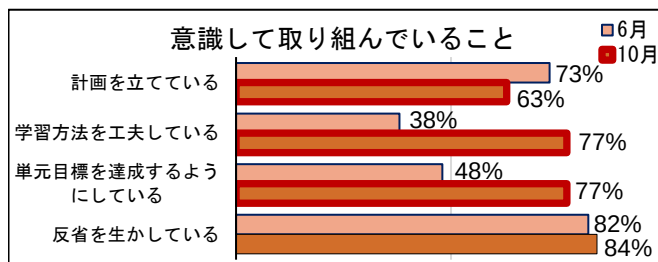


図6 自律的な学習者の学習サイクルに関する調査

し一方で、このことは、学習の見通しをもつことこの重要性に気づき、「計画を立てること」を、より厳密に捉えた姿勢の表れではないかと考えることもできる。そこで、生徒の学びの跡が見えるようなポートフォリオ評価等を有効に活用し、生徒自らが先を見通した計画が立てられるよう指導していくことが必要であると考えます。

一方で、「自分なりの学習方法を工夫している」と答えた生徒が、6月より39ポイント増えた。検証授業では、発音を意識した単語の導入や音読を通して新しい表現等に慣れ親しませることで、言語材料を無理なく習得し、目標を達成できたという喜びを味わわせることができたからではないかと考える。

また、「単元の目標を達成するようにしている」と答えた生徒が29ポイント増加した。これは、CAN-DOリストを基にした単元の目標と評価規準を共有することで、生徒が主体的に活動に取り組むことができた結果だと考える。

さらに、授業後もALTに積極的に話し掛けたり、音読を家庭学習に取り入れたりするなど、意欲的に学習に取り組む姿が見られたことから、自らの学びを振り返り、学び続けようとする態度の育成につながったのではないかとと思われる。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 先行研究を基に、「自律的な学習者」を定義し、効果的な指導の在り方を明らかにすることができた。
- (2) CAN-DOリストを基にした学習計画表を活用し、単元の導入を行ったことで、目標が明確となり、見通しをもって活動に参加できたという生徒の姿が見られた。
- (3) 音声を重視した活動を行ったことで、文字と音声の関係に気づき、発音の規則に気を付けたり、文字を積極的に書こうとする生徒の姿が見られた。
- (4) 音読を家庭学習に位置付けるなどの学習方法の工夫を行う生徒の姿が見られた。
- (5) 自己表現や文構造に関する問題の無答率が下がるなど、慣れ親しんだ英語を表現してみようとする積極的な態度を育成することができた。

2 今後の課題

- (1) CAN-DOリストの更なる活用に向けて教科内で研修を深めていく必要がある。
- (2) ポートフォリオ評価の充実を図るために、学習過程や活動の進捗状況を視覚的に示すとともに、生徒の作品や自己評価に教師からの適切なフィードバックを加えてファイリングさせていく必要がある。
- (3) 基本的な表現や綴りに関しての誤答が依然として見られることから、音声重視の指導を更に進めるとともに、文字指導をより丁寧に行っていく必要がある。

＜引用文献＞

- | | | | |
|-----------------|---|-------|---------|
| 1) 樋口忠彦 編著 | 『英語授業改善への提言』 | 2012年 | 教育出版 |
| 2) 綾部保志 著 | 『自律した学習者を育てる英語教育の探究』, 「CEFR 研究を教育実践に活かすための視座」 | 2014年 | 中央教育研究所 |
| 3) 村野井 仁 著 | 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 | 2006年 | 大修館書店 |
| 4) 鈴木寿一・門田修平 編著 | 『フォニックスからシャドーイングまで 英語音読指導ハンドブック』 | 2012年 | 大修館書店 |
| 5) 松香洋子 著 | 『フォニックスってなんですか?』 | 2008年 | mpi |

＜参考文献＞

- | | | | |
|--------------------------|---|-------|-------------|
| ○ 文部科学省 | 『中学校学習指導要領解説 外国語編』 | 平成20年 | 開隆堂出版 |
| ○ 文部科学省 | 「国際共通語としての英語力の向上のための 5つの提言と具体策」 | 平成23年 | 文部科学省 |
| ○ 文部科学省 | 「各中・高等学校の外国語教育における 『CAN-DO リスト』 の形での 学習到達目標設定のための手引き」 | 平成25年 | 文部科学省 |
| ○ 寺島隆吉 著 | 『英語にとって「音声」とは何か?』 | 2000年 | あすなろ社 |
| ○ 金谷 憲 編 | 『英語授業ハンドブック 中学校編』 | 2009年 | 大修館書店 |
| ○ 江利川春雄 編著 | 『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』 | 2012年 | 大修館書店 |
| ○ 白畑知彦・鈴木孝明 著 | 『ことば習得－母語習得と第二言語習得－』 | 2012年 | くろしお出版 |
| ○ JACET SLA 研究会 編著 | 『第二言語習得と英語科教育法』 | 2013年 | 開拓社 |
| ○ 投野由起夫 編 | 『英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』 | 2013年 | 大修館書店 |
| ○ 大名 力 著 | 『英語の文字・綴り・発音のしくみ』 | 2014年 | 研究社 |
| ○ ベネッセ教育総合研究所 | 『速報版 中高生の英語学習に関する実態調査2014』 | 2014年 | ベネッセ教育総合研究所 |
| ○ 門田修平 著 | 『英語上達 12 のポイント』 | 2014年 | コスモピア |
| ○ 望月明彦・深澤 真・印南 洋・小泉利恵 編著 | 『英語 4 技能評価の理論と実践』 | 2015年 | 大修館書店 |
| ○ 上山晋平 著 | 『英語教師のためのアクティブ・ラーニング ガイドブック』 | 2016年 | 明治図書 |

長期研修者 [吉永 あゆみ]

担 当 所 員 [別 枝 昌 仁]

【研究の概要】

本研究は、自律的な学習者の在り方や、そのような生徒を育成するためにはどのような態度や能力を身に付けさせるべきなのかについて研究したものである。

具体的には、自律的な学習者の姿とその指導方法を明らかにすることができた。

検証授業においては、外国語の学習サイクルを確立させるために、CAN-DOリストを目標と振り返りの場面で活用することや、発達段階を考慮した動機付けを目的として、音声と文字の関係について意識させる指導と音読の工夫を行った。

その結果、明確な目標をもち、コミュニケーション場面での活用を通して、新出の言語材料の意味や用法を自然に習得したり、音声と文字の関連の重要性に気づき、自分なりに工夫して学習を継続しようとしたりする生徒の姿が見られるようになった。

【担当所員の所見】

本研究の特色は、外国語学習における自律的な学習者の姿をPDCAサイクルとの対応で捉え、その育成に向けた各段階の指導の在り方を明らかにした点にある。そして、指導に当たって、CAN-DOリストを学習の見通しと振り返りに生かすことと、文字指導の充実のために音声重視の学習活動を充実させることの意義を明らかにしている。とりわけ、基礎研究を基に作成したCAN-DOリストは、教科書との関連も明示され、各学校でも活用できるものとなっている。

平成33年度全面実施の新学習指導要領においては、互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を重視し、授業を外国語で行うことを基本とし、具体的な課題等を設定するなどして、学習した語彙、表現などを実際に活用する言語活動を改善・充実することが示されている。特に、「話すこと」の領域は、「話すこと（やりとり）」と「話すこと（発表）」に分けられた。授業そのものを英語によるコミュニケーションの場とする学習活動の充実が求められており、本研究はその実現を目指したものである。

自律的な学習者の育成には、教師による働き掛けや、生徒自身による試行錯誤など、継続的な取組が必要である。その意味で本研究は、第一步を踏み出した段階にある。今後、自律的な学習者を自ら体現する教師として、授業改善に向けた努力を不断に行う姿を生徒に示すことを通して、研究は更に深まるものと期待する。